

---

# ある世界のややこしい関係のお茶会

ひろね

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ある世界のややこしい関係のお茶会

### 【著者名】

27981M

### 【作者名】

ひるね

【あらすじ】  
タイトルひとつ、ややこしい関係なのにのんびりお茶をする光景  
?

白を基調にした、汚れひとつ見当たらぬさうな部屋に、ある時刻を告げる音が響いた。

それを耳にした人物は、机に向かつてペンを走らせていた手を止めた。

「もうこんな時間か…」

昼から数刻、ちょうど小腹が空く時間。いつもなら、側にいる者が茶を持ってくる時間だった。

それにしても、三時がお茶時のはじこの世界も万国共通なのか。どちらにしろ、今日は茶はいらないと部屋の主は先に告げていたため、茶を持ってくるものはない。

そのため、静かに椅子から立ち上がった。

「さて、そろそろ行くか」

部屋の主は一言呟くと、部屋の中にある扉のひとつに手をかけた。少し軋んだ音を立てながらあいた扉の先は、白を基調とした部屋とはまったく趣が異なる部屋につながっていた。

なんというか、部屋といえるかどうかも微妙な どちらかといふと、不思議な空間というほうがあつていい。歩いて進んでいくのに、足元には床が見えない。天井もどこにあるのか分からぬ。もちろん、壁も。

そんな中、ポツンと小さな丸テーブルがあり、そのテーブルに頬杖をつくよつにしてぼーっとしている人物がいた。

「どうやら待たせたようだ」

「いや、こちらとて少し前に来ただけだ。あまり待ったという感じではないな」

「そうか？ その割りにぼーっとしていたようだが」

「いつものことだらう」

そう、こつものこと…だつたりするのだ。目の前の人物にとつては。

いつだつて本心がどこにあるのか明かしてくれない、と座つている人物を見てため息をつく。

「そんなことより座つたらどうだ」

「あ、ああ」

いわれるままに椅子に座ると、先にいた人物がなれた手つきでお茶の用意をする。

田の前に出されて一口すする。

「うまいな

「だらう？」

田を細めて嬉しそうに笑う相手は、いつ見ても見惚れてしまうほどの姿の持ち主だつた。

さらさらの銀色の髪、高い空のような青い瞳は人の中でもまれな色。それに合わせたかのような整つた顔立ち。どこをとっても文句ない。

しいて言えば、せつかくのさらさらの髪も、手入れに关心がないのか、無造作に束ねたままなのと、肌は口に当たつていないせいか、少々不健康といつてもいいほど白いことか。

「しかし…」

「なんだ？」

同じようにお茶を一口飲んだ相手は、きよととした顔を向ける。

「いや、なんでこんなに茶を入れるのにな慣れているんだ？ 他のものにやらせればいいだろうが」

「毎日自分でやつてるからな。なかなかいろいろな方法を試してみるのは楽しいぞ。茶葉もいろいろあるしな」

「自分でやつてこるのか！？」

信じられない…とばかりに、呆れてカップをガシャンと音を立てておいた。

なんてことだ。信じられない 思わず頭を抱えたくなるような心境に陥る。

「何をそんなに驚く？」

「これが驚かずにはいられるか！」

「さうか？」

「そうだ！」

悲しことに、超マイペースな相手は、自分がこれだけ信じられない思いを抱えているのに気づかない。

「信じられない…昔の君の面影はどうこへ行つたんだ！？」

「昔？」

「そうだ！ かつてこの世界を闇に陥れようとした者などと……誰が信じるか！？」

勢いあまつて、テーブルをだんつと叩いて立ち上がる。

そうなのだ。目の前にいる人物は、かつて『魔王』と呼ばれ、『神』と呼ばれるようになった自分と対峙し、長い時をかけて戦つた者。

互いの力を認めたがため、じつして今もひつそりと会っているのだが

「それは昔の話だろう。私はお前に負けたというのは、世に広まつてだいぶ経つではないか。そうだろう、ジェルファルレイ?」

「……」

しつと言われてジェルファルレイと呼ばれたほうは力なく座り込んだ。

世の中では神である彼、ジェルファルレイが、魔王イントウリーグを倒したとなっているが、本当のところ、イントウリーグが飽きたため戦うのをやめただけだ。

そのまま戦い続けていたら、結果はどうなつていたか分からぬ、とジヨルファルレイは思つてゐる。

イントウリーグは常に面白いことを探し続ける自由奔放な性格だ。今の話の流れから、どうやら今はお茶をうまく入れることが樂しみらしい。道理で最近こうしてお茶に誘われる回数が多くなったのかが分かり、ジヨルファルレイはため息をついた。

とはいへ、『魔王』としての責務まで放棄しているようでは困る。ここ最近、人から魔族の被害が多いと聞く。

それは要するにイントウリーグが魔王として魔族を統率するのを急げているからだ。その理由が『お茶を美味しく入れる方法を模索するため』など、他の者が聞いたら、どう思つだろうか。誰も信じないだろう。

とはいへ、『魔王』と呼ばれているのだから、それ相応のことを

してくれないと困る。

「お茶には付き合つが、最低限の仕事くらいいし」

「は？」

「最近苦情が多いんだよ、魔族の！ どうにかしろよー。」

この世界は神族および魔族の干渉が強い。そのため、弱きものは魔族を怖がり、そして神族に助けを求める。その助けを求める声が、最近多いのだ。

「苦情ねえ……それをどうにかするのが、神であるお前の仕事だらう」と、現状を訴えても、返つてくるのは我関せず、の言葉のみ。

「だいたい、私は一度たりとも仲間など求めたことはないぞ」

確かにイントウリーグは魔王と呼ばれている。

イントウリーグは魔族だし、他者よりすば抜けて力が強いが、生まれながらの魔王ではない。自分の娯楽のためにジエルファルレイと戦つただけで、魔族を統率しなければならない義務はどこにもない。

彼らはイントウリーグの強さに惹かれ、集まり、そして言つことを聞いているだけだつたりする。

ただ、そのイントウリーグが何も言わないと、建前上、神であるジエルファルレイに倒されたといつこと、言つことを聞かない輩が増えているだけだ。

ジエルファルレイは額に手を当てながら。

「手は……人々が打ち始めたらしい。人の中にも強いものはいる。その中で『勇者』を作り、『魔王』を倒そうといつことになつたそ

うだ

「なつたそだ、といひとば、お前にしてみると事後承諾か？」

嬉々として尋ねてくるイントウリーグに、ジェルファルレイは眉間にしわを寄せながら頷く。「ああ。先に聞いていれば止めさせたわ」

イントウリーグの強さはジェルファルレイ自身が良く知っている。それをたかが人間がどうにかできるのか。なにより、イントウリーグの前にたどり着く前に、無駄な死人が増えるだけだろう。それを考へると、出てくるのはため息しかなかつた。

「勇者……ねえ」

「ああ、勇者だ」

「確かに人の中にたまにやたら強いヤツが出るな。神族、魔族との交わりにより……」

「ああ、そうだ。だからこそ厄介なのだ。その力を過信して、魔王に勝てると思つていたら」

と、そこまで口にすると、先ほど思い浮かべたシーンをまた再現してしまい、最後まで口にする気になれなかつた。

「ふーん。な、その勇者つてどんなヤツか分かるか？」

「勇者？ そうだな、確か名は……レーンといつたか」

手元に来た書類を思い出しながら、ジーニーにテーブルの中央に光る玉を作り、そこにその人物の姿を浮かび上がらせた。

「ほう、勇者というから、もっと筋骨隆々な厳つい印象だつたが……結構な美丈夫だな」

「……まあ、確かに」

「それで、これが私を倒しに来る　　と云うわけか  
「……そういうことになるな」

面白そうな表情になつていくイントウリーグとは逆に、ジェルフアルレイは面白くないといったしかめつ面になつていく。返事もおざなりだ。

テーブルの上の玉を消すと、イントウリーグに「そんなことだから、最低限の躾だけは何かしてくれ」と懇願した。  
躾とは……と思わないでもなかつたが、魔族は自己中心的で人に害なすことでも平氣である。

だから統率を図るより、そのあたりの制御のほうが先だろつと判断したのだが、魔族の中でもさうに酔狂な性格の持ち主が素直にそれを聞くことはなかつた。

「ふんふん、なるほど。それなら丁重におもてなしをしないとな」  
「お、おい？　だから死人を増やすよつな…」

「なにを言つ！　私の今の楽しみは茶だ。その茶に呼ぶのに失礼のないよう、勇者が来るまでにしつかり茶の入れ方を覚えると言つているのだ！」

「……は？」

勇者は魔王を倒すために行くのだが……と思つてゐる。

「ふふん、人にしてはなかなかの顔だつたじやないか。それに今いる中で一番強いのだろつ？　会つてみたいと思つのは当たり前じやないか」

早くも好奇心丸出しのイントウリーグにジェルフアルレイは頭を抱えて深い深いため息をついた。

が、どうやらそれだけでは終わらせてくれないらしい。

「はう、そうだ。彼は私が魔王だと気づいてくれるだらうか？」

と、言つて自分の身なりを氣にしだす。

最近、茶のことばかりで手入れしてなかつたからな、と、いう声が聞こえるが、問題はそこじやないだらう。

世間では魔王の容姿についての話題は出回つていない。そしてイントウリーグは闇に近い魔族とこうより、神族に近い明るい色彩と美貌を持つている。

なにより

「分からぬ……かもしだれないな。魔王が……女性で、しかも絶世の美女と言われるに値するといつ話を、聞いた……」

そう、魔王イントウリーグは女性なのだつた。

そのために。

そのために、ジエルファルレイは戦つことを止めたあとも、彼女の誘いがあればこうしてひつそりと会つに行くのだから。

（間違つて、魔王に囚われた氣の毒などいかの姫君として連れてこられそうだな……）

ジエルファルレイはそんなことを考える。

が、それが本当のことになるのはもつ少し先のこと。

(後書き)

アカウントを取得したので試し投稿してみました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7981m/>

ある世界のややこしい関係のお茶会

2010年10月10日03時21分発行